

# ポブベックのやさしい投資信託

## 第41回 ファンドの選び方 その3

### (9) ファンドの選び方

#### (9-B) 投信評価会社の使い方

最近では多くの投信評価会社が、投信に格付をつけています。投信の格付は、債券の格付と違い、満期時に元本割れせずに返ってくるかどうかを分析しているのではありません。リスクに見合ったリターン(収益率、または基準価額の上昇率)を得ているのかどうかを分析し、ランク付けをしているのです。

同じリスクならリターンが高い方が良いでしょう。逆に同じリターンならリスクが低いファンドを選択したいですね。どの投信評価会社も、この考え方に従って、ファンドの基準価額の推移を分析しています。ただ、**分類の仕方**(どのファンド同士を比較するか)や **リスクの計算の仕方**が、評価会社によって違うために、同じファンドでも評価会社によって違う格付になってしまうのです。

この意味を理解する事が、投信評価会社の上手な利用の仕方につながるのです。

#### ファンドの分類

AファンドとBファンドの1年間の基準価額上昇率が以下の表のようになったとしましょう。同期間の日経平均、店頭株指数の上昇率も併記しました。

	A ファンド	B ファンド	日経店頭 平均	日経平均
上昇率	30%	25%	35%	20%

AファンドとBファンドを比べてみましょう。Aの方が上昇率は大きいですね。では、Bのファンドは運用に失敗したのでしょうか？

もし、Aが店頭株に投資するファンド、Bが東証一部上場銘柄に投資するファンドとしたら、Aの方が上手な運用とは言えないですね。Aは店頭株の指数と比べますから、指数に負けています。逆にBは日経平均を5%も上回っています。Bのファンド

の方が運用は上手くいったのです。

このAとBのファンドを同じカテゴリーに分類してランキングを付けると、Aは優秀なファンド、BはAよりもランクは劣ると判断されるでしょう。しかし、AとBをそれぞれ別のグループに分けると、Aは店頭株に投資するファンドの中で比較されずし、Bは東証一部、または大型株に投資するファンドの中で比較されるでしょう。

ところが、現在日本で運用されているファンドは5,000本以上あるのです。ファンドの種類も様々です。同じ名前のファンドだとしても、運用会社によっては少しづつ、運用方針が違います。同じカテゴリーの中で比較するには、ハンディが大きすぎる事が良くあるのです。

#### リスクの計算の仕方

リスクと一概に言っても、その意味は様々です。みなさんはリスクと言うと、何をイメージするのでしょうか。一般的には、元本を下回るかどうかをイメージするかもしれません。

ファンドの成績を比べる際に、リスクと言えば、標準偏差のことを指します。(投信評価会社によっては、この名称をそのまま用いている場合もあります。標準偏差と書かれていたら、「あ、リスクの事だな」と理解してください。)

しかしながら、投信評価会社によってはこのようなリスク値の計算方法を採用せずに、独自にリスク値の計算の仕方を定義し、それを使っている場合もあります。計算方法が違えば、ファンドのランキングだって変わってきます。どの方法が正しいという事ではありません。計算方法が違えば、結果は違って来るのだから、一つの評価会社の格付を絶対視してはいけないということなのです。いくつかの評価会社の格付を比較して利用したり、または格付の上下に一喜一憂せずに長い期間上位にランク付されているファンドを選ぶなどの工夫が必要なのです。次回はリスクの計算について更に詳しく解説しましょう。